慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最終外部評価
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	活動報告書 Vol.5, (2011.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20120300-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最終外部評価

本拠点では６名の外部有識者からなる外部評価委員会を設置している。2008年には発表会を開催してヒアリングによる評価を依頼した。最終年度ではいままでの資料をすべて送付し、書面による評価を依頼した。以下のその要点を記す。

１）評点

「十分に成果があがっている（１）」から「成果が出ていない（５）」までの５段階評価での平均評点は1.25（範囲1.0―2.0）で、2008年に拠点独自で行った中間評価での平均評点1.83を上回っていた。

２）当初目的に沿った計画の実現

論理と感性を統合的に理解しようという試みが高く評価された。もちろん、そのような目的が５年間で達成できるわけではないが、この間に目的に沿った着実な進歩があったことが評価されていた。特に生物学的背景から文化にいたる融合的なアプローチが評価されていた。

３）新たな学術的知見

個別の研究成果としてはカラスの社会的順位の推移性、新生児の言語獲得、動物の道具使用、脳機能研究、論理的推論や証明論、絵画表現における影の研究などが高く評価されている。一方で全体を統合的にまとめる研究が十分でないという指摘もあった。

４）若手育成

英文での研究発表の促進や、特任教員の任用が高く評価されているが、若手にもうすこし教育に参加してもらった方がよかったのではないかという意見もあった。また文理融合型の研究者育成の具体的な例を示して欲しかったという意見もあった。

５）組織

拠点リーダーのリーダーシップによる運営組織は好意的に評価されている。特に大学院教育との連携などが有機的に行われたことが評価されている。

６）国際競争力の取り組み

トップレベルの実験設備を備えたことが高く評価された。また、英文執筆の講習会、国際シ

ンポジウム、セミナーなども評価された。研究員の国際公募も評価されているが、一方では世界拠点としてはもっと海外からの研究者がいてもよかったのではないかという指摘もあった。

７）研究経費

MRI 導入などに経費が投下され、それによって神経美学などの成果があがったことが効率的な使途として評価された。一方で、施設の賃料などにかなりの経費が使われているので、大学としてなんとかすべきではなかったのかという意見もあった。

８）情報発信

国際シンポジウムなどの国際研究集会以外に CARLS series という全５巻の英文出版が高く評価された。またホームページも分かりやすいという評価であった。

９）国際連携

海外からの事業推進担当者や、海外拠点との協定が高く評価されたが、国際連携についてはやや分野にかたよりがあったのではないかという指摘もあった。

10）その他

リース契約による MRI 機器がプログラム終了とともに返却されることについて、なんとか出来なかったのかという指摘があった。研究倫理委員会を設置していたことについて先駆的であるという高い評価を得た。また、中間評価以降、資料の送付だけでなく、研究現場を訪問する機会が欲しかったという意見もあった。

以上が評価概要であるが、忙しい時期に多量の資料に目を通して、評価をしていただいたことを心より感謝する。多少、面映い評価を頂いた点もあるが、概ね予定通りの事業を展開し、目的を達成できたと判断していただけたものと思う。プログラム終了後についての懸念を表明された方がいたが、若い研究者がこの拠点での経験を活かしてさらに大きな教育研究拠点を形成されることを心より祈る。